

令和 4 年 6 月 13 日現在

機関番号：12603

研究種目：挑戦的研究(萌芽)

研究期間：2019～2021

課題番号：19K21648

研究課題名(和文)ベトナムのチャム回儒とイスラーム・儒教融合

研究課題名(英文) Muslim-Confucian intellectuals of the Cham and syncretism between Islam and Confucianism in Vietnam

研究代表者

新江 利彦 (Shine, Toshihiko)

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・研究員

研究者番号：60418671

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 5,000,000円

研究成果の概要(和文)：チャムの創世伝承サカライ・ポークックは、世界・宇宙の最初の存在をクックというチャム語(アラビア語QTBまたは漢語「極」)で示し、チャムのイスラーム理解においてムハンマド=ロゴス(神の言葉)となみなす神学と、流出説的世界観、天のコーラン=書物の母umm al-kitabから始まる王岱輿的な太極=理(形相エイドス)理解があったことを示唆した。しかしながら、アラビア語QTBを語源とする可能性もある「極」(kuk/cucクック)と、ヒジュラ暦の8年周期を示すチャム漢語の八天干(bat thien can)ほかに、チャムにおいてイスラーム・儒教融合と確定できる文献上の証拠は見出すことができなかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

チャンパーのイスラーム理解が、スンニー派とくにシャーフイー派に近い正統派であり、文献上逸脱は見られないという主張は過去にもあったが、今回調査結果はそれを裏付けるものであった。一方、チャムにおける裁判は、統治者の代理人としてもカーディーの存在が確認できなかった。統治者すなわちチャンパー藩鎮王(本鎮王)が、チャム人およびキン人藩僚の補佐のもと、直接裁判を行っているように見受けられた。阮氏の裁判制度に基づかないチャム固有の司法・裁判制度に基づくチャンパー藩鎮王による裁判においてある程度実施可能であったであろうイスラーム法廷の実施は、「チャンパー王家文書」所収の裁判記録等の文献からは確認できなかった。

研究成果の概要(英文)：The Cham's Genesis text "Sakarai Po Kuk" describes the first existence of the world and the universe as "Kuk" (originated from Arabic QTB or Chinese "ji"), which is regarded as Muhammad-Logos (God's word) in the understanding of Islam in Cham. It was suggested that there was an understanding of theology, the emanationist worldview, and Wan Da-yu's style Tai-ji understanding starting from the Heavenly Quran = Umm al-kitab, 'mother of the Book'. However, there are only two Confucian terms, the Kuk (Ji) and the bat thien can (it is used as eight-year cycle of the Hijri calendar) in Cham's Islamic science. So, we have not yet gotten evidence in the Cham and Sino-Cham literature that confirmed Islam-Confucian fusion in the Islam of the Cham.

研究分野：歴史学

キーワード：the Cham Champa Panduranga Bani (Awal) Cam (Ahier) Shafii Emanationism Islam-Confucian fusion

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

中国元朝のモンゴル人皇族同様に、1644年以降中国を統治した清朝の満州人皇帝並びに皇族はチベット仏教に帰依した。しかし、元においても清においても、科挙による官僚登用を行う以上、その国家イデオロギーは宋・明同様に儒教であった。明清時代の中国ムスリム漢文知識人は、自らの信仰(イスラーム)と儒教が矛盾しないことをその漢文著作において示そうとした。このような人々を回儒といい、その漢文文献を回儒文献という。1695年～1832年まで、ベトナム中部南端のチャンパー藩鎮(またはパンドゥランガ・チャンパー国、または順城鎮)は、ベトナム広南阮氏・大南阮朝の藩屏であった。そこでは、チャム回儒(ベトナム・チャム漢文知識人)たちが、チャンパー王家文書と呼ばれる、漢文とチャム文による膨大な裁判・行政文書を作成し、並行して非漢文知識人たちがチャム文・アラビア文による文学・宗教文献を作成した。その規模はフランスの文書館やベトナム・カンボジアのチャム集落で確認されているものだけでも20,000ページに及ぶ。チャム回儒もまた、中国ムスリム知識人同様に、高度な漢文能力をもっていた。明末清初の中国回儒である王岱輿(1657年ごろ没)は、イスラーム哲学(及び一部の神学)が受容したアリストテレス的な世界観を応用して、「創造主としての神が真主であるのにたいし、自己顕現する神が真一であり、太極とは真主が立ち立てた天地万物の理(形相エイドス)であり、その後で天地万物のかたち(質量ヒュレー)ができあがる」と考えた。このようなイスラーム・儒教融合的な世界観が、中国ムスリムの影響下、またはベトナム・チャム回儒独自に形成されたか否かが、研究開始当初の筆者の問いかけであった。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、儒教国家ベトナム(広南阮氏・大南阮朝)において、チャム回儒によるイスラーム・儒教融合的な世界観が形成されたか否かを明らかにすることであった。また、研究に伴い期待できる効果として、ベトナム漢文、チャム漢文とチャム文、アラビア文による儒教とイスラームにまたがる研究者ネットワークと研究環境の構築を目指した。

## 3. 研究の方法

デジタル化したベトナムのチャンパー王家文書の解読と、中国海南島、ベトナム、カンボジア、マレーシア、インドネシアにおけるイスラーム・儒教融合・祭祀分業に関する調査・研究により、早期東南アジア(15～17世紀)のイスラーム実践と、その理論的支柱となる世界観を明らかにしようとした。また、東南アジアにおけるイスラーム祭祀・祖先祭祀分業、中国思想やヒンドゥー思想、暦・絵画・音楽・舞台などの中に盛り込まれたイスラーム的価値観、イスラーム伝播とイスラーム理解における回儒(ムスリム儒教知識人)の役割とその内容について、近世日本における神道・儒教融合(神儒)とも比較しながら考察した。また、中国・東南アジアの土着イスラーム研究者と情報を共有して、ネットワークを強化することを目指した。

## 4. 研究成果

2019年度は、3回の海外調査(ベトナム7/24-8/02, 12/27-1/03, 中国11/07-12)、1回の国内調査・会合出席(10/05-07)を行い、図書館や集落知識人書架、信仰施設書架において資料収集を行うとともに、研究者、集落知識人と情報共有を行い、ネットワークと研究環境の構築をはかった。2019年11月の中国調査では、海南省三亜市で2つの海南チャム集落(ムスリム集落)回輝村、回新村で言語及び歴史文化資料収集、モスク(清真寺)の碑文・墓碑銘調査及び聞き取りを行った。また三亜市内の孔子廟(崖城学宮)の科挙合格者碑文において海南チャム・ムスリムの合格者の有無を確認した(チャム・ムスリムと思われる氏名はなかった)。2019年12～1月のベトナム調査では、ビントゥアン省の2つのチャム集落(パニー集団)Palei Bhum(扶持村)、Palei Mali(合義村)2つのキン族漁労民集落(ヴァン集団)福祿漾、新隆漾、4つのキン・チャムのクレオール集落(キンキュウ集団)遵教村、新睦村、春光村、春會村、2つのキン族農耕民集落一泰合村、春安村の信仰施設調査を行い、施設が所蔵する祭祀・儀礼文書の撮影を行った。15世紀初頭のチャムのイスラーム聖者「Po Klaong Barau」(新たな主)は、キン族(ベトナム族)によって「Chua Duong Tu」(主楊鬚、チュア・ズオンラウ、チュア・ヤーンラウ)という土地神と見なされ、イスラーム由来のチャムの男性土地神である「Po Adam」のキン族による呼称「Duong than」(陽神)と習合し、その配偶女神(天依阿那聖母 Po Nai、陰神 Po Ha-oa)と共に、チャムと共存する儒教・仏教信仰者であるキンキュウ集団や隣接キン族の集落信仰施設の中心に祀られていることが確認できた。コロナ禍のため、課題実施期間中の海外におけるフィールドワークはこの3回のみとなった。

収集資料の精読の成果物として、単著論文1本、単独口頭発表2本を公開した

・論文：新江利彦(2019)「关于《占主编年史》与占城南迁宾直龙的考察」海洋史研究(広州：海洋史研究会)13, 185-203.

・発表：新江利彦(2020)「三つの結婚移民事例：八世紀、十七世紀、二十世紀に中国・ベトナム」

ムから日本へ移住した人々」関西外国語大学公開講座「見えない『わたしたち』 マイノリティからみる歴史・地域・共生の姿」2020年1月27日、於・関西外国語大学。  
・発表・発表：新江利彦（2020）「海南省三亚市回輝人（海南回族または海南チャム族）に関するメモ」AA 研共同利用・共同研究課題「ジャワ語及び東南アジア諸語テキストにみる宗教変容 イスラーム化過程における国家の戦略と役割」2019年度第3回研究会、2020年2月23日、於・東京外国語大学。

2020年度は、3回の国内調査を行い（11/13-15、11/16-21、12/08-12）日本国内所蔵の漢文、アラビア文資料と日本語・英語による先行研究論文を精査し、ベトナムの研究者たちと情報を共有した。また、4つの原資料 - ①19世紀チャム人のラマダーン明け説教文（アラビア語）②19世紀チャムのイスラーム及びアラビア語入門書（アラビア語）③アーリヤー・ポーチョン（1822年に退位したチャム王の記録、チャム文）④サカライ・ポークック（19世紀チャム人によるイスラーム的な創世記断片、チャム文）のローマ字転写と翻訳を行った。「19世紀チャム人のラマダーン明け説教文」は、末尾に祖先救済祈願文を含む。ムスリムの祖先であれば救済祈願は不要なため、この説教文作者の近い祖先は非ムスリムであったこと、また作者は東南アジアで優勢なスンニー派シャーフィーイ両法学派においては極めて特殊な「異教徒祖先の救済を認める神学説」を奉じることが明らかになった。「19世紀チャムのイスラーム及びアラビア語入門書」の内容は南タイなどで出版されているイスラーム入門書（ムコグダマ）に近く、チャムの伝統的なイスラーム教育がシャーフィーイ法学派の国々と共通することが明らかになった。「サカライ・ポークック」はイスラーム神話を扱うにもかかわらず、世界・宇宙の最初存在をクックというチャム語（アラビア語 QTB または漢語「極」、いずれもチャム語読みやベトナム語読みではクック）で示し、チャムのイスラーム理解においてムハンマド＝ロゴス（神の言葉）となみなす神学と、プロティノス＝イブン・スィーナ風の流出的世界観、天のコーラン＝書物の母 umm al-kitab から始まる王位継承的な太極＝理（形相エイドス）理解があったことを示唆した。しかしながら、アラビア語 QTB を語源とする可能性もある「極」（kuk/cưc クック）のほかには、「八天干」（bát thiên can バッティエンカン）という漢語で呼ばれる純粋太陰暦の八年周期だけが、儒教的・漢語的な知識のチャム・イスラーム科学への移転の痕跡であり、その両方とも中国回儒文献には用例がなく（太極や天干の用例はあるが、極や八天干の用例はない）チャムにおいてイスラーム・儒教融合であると確定できる文献上の証拠は見出すことができなかった。

収集資料の精読の成果物として、単著論文1本、単独口頭発表1本を公開した。

・論文：Shine Toshihiko (2020), ON THE CHINESE MIGRANTS AND OVERSEAS JAPANESE IN ANCIENT ERA : COMPARISON WITH KOREA AND VIETNAM, AND THEIR ROLE IN CULTURAL-TECHNICAL TRANSFER AND DIPLOMACY, The Journal of Intercultural Studies 42 (Osaka: Kansai Gaidai University), 23-59.

・発表：新江利彦（2021）「チャムのイスラーム的宇宙観：サカライ・ポークック（極の哲理）を読む」AA 研共同利用・共同研究課題「ジャワ語及び東南アジア諸語テキストにみる宗教変容 イスラーム化過程における国家の戦略と役割」2020年度第1回研究会（通算第4回目）2021年2月23日、於・東京外国語大学。

2021年度においては、7回の国内調査を行い（国会図書館・東洋文庫・AA 研 4/11-14、6/29-7/01、9/01-9/04、1/06-08、埼玉県インフォーマント宅・東京都紙の博物館 10/21-24、民族学博物館・大阪大学 11/26-28、岡山～広島各博物館 12/24-26）日本国内所蔵の漢文、アラビア文資料と日本語・英語による先行研究論文を精査し、オーストラリア（Dr. Li Tana, ANU）フランス（Dr. Anne-Valérie Schweyer, CNRS）カンボジア（Mr. Abu Lebka）ベトナム（Dr. Sakaya, HCM-USSH, Dr. Basiron, HAV, Mr. Arjuna Đạo Thanh Quyên, VICAS）らの研究者たちと情報を共有した。また、3つの原史資料 - ①アーリヤー・ポーチョン異本（チャム王ポーチョンが1822年に退位した後の伐木造船労役と反乱の史伝、チャム文）②アーリヤー・ポーボクトゥー異本（チャム王ポーボクトゥーが1828年に即位した後の伐木造船労役の史伝、チャム文）③サカライ・ポークック異本（19世紀チャム人によるイスラーム的な創世記について、八千十二支によるおおよその年代を付したものの、チャム文）のローマ字転写と翻訳を行い、また、④タブタン（教典摘要あるいはイスラーム入門書 Al-Muqaddimah、一部チャム文、ほかはアラビア文）の目録作成、該当するコーランの各章節との対比作業を行った。このほか、ベトナムのチャム居住地で活動する日本の非政府組織「学び舎つばさ」の協力を得て、2021年2月以来毎月第二日曜日午前に、ベトナムとカンボジアのチャムの知識青年らの勉強会「シンピアイ・チャム・ニュッポン」を実施し、リジャー「Rija」など季節ごとの、チャムの様々な儀礼や儀礼音楽・楽器、儀礼絵画についてチャム知識青年と共に発表し、また意見交換を行った。

アーリヤー（韻文）史伝は、歴史記録ではあるが、同時期同一事件に関するベトナム漢文など他史料とのクロスチェックが難しく、これをそのまま史実とみなすことはできない。しかし、冒頭などにおいて唱えられる神格や聖者の名は基本的に唯一絶対者アッラーフや預言者ムハンマドではなく、アッラーフの諸機能の名（靈魂 al-ruh, 真実 al-haqq）や天空神 Debita、ヒンズー教の神 Devata に由来）や、ムハンマドの弟子の名（Ali）である。このことは、チャムのイスラーム

受容において、神や預言者の名を恐れ多いものとして意図的に避けたこと、それにより、神本体や預言者自身よりも、神の諸機能や預言者の弟子たちのほうが、より明確な信仰対象となっていたことを示す。これは、儒教の祭祀構造物（聖堂・文廟）において、唯一絶対者である天そのものを祀る祭壇がなく、一方で天の一機能である先農（炎帝神農）を祀る先農壇があることや、孔子廟において顔回ら弟子や後代の孟子、朱子が祀られていることに類似する。儒教が祀る天の一機能－炎帝神農は、その民間信仰化した三体の灶君（かまど神）による各家庭の善悪観察と年末ごとの昇天・吉凶決定への対応（灶君版画を焼却して天に返す行為）が、中国の漢族（華人）やベトナムのキン族（越人）における歳末行事となっている。かまど神は年始ごとに各家庭のかまどに吉凶判定を持ち帰るとされる。

ベトナム・チャムの年始儀礼はリジャー（Rija はアラビア語で祈願の意）と呼ばれる。リジャーは降霊舞踊儀礼であり、Po Haniim Per らイスラーム聖者を降霊させて吉凶を占い、また凶を払う。この際に、様々な楽器による演奏がなされ、また伝家の民族画であり儀礼絵画である布絵「パニン」が、儀礼舞台にかけられる。チャム社会では紙は中国清朝仏山などから輸入される貴重品であり、燃やされることはない。布絵「パニン」のモチーフは、今日も流布するキン族の灶君版画と酷似する。また、「パニン」全体の構図は、タイやカンボジアにおける綱引き儀礼の由来である、インド叙事詩ラーマヤナに見える世界創造作業・不死薬製造作業「乳海攪拌」と酷似する。また、今日のチャム楽器は、カンボジアやマレー・インドとも共通点を持つが、酷似するのは中国清朝の回部音楽の各楽器である。チャムにおける儒教とイスラームの融合には、中国清朝とベトナム阮朝のムスリム漢文知識人の接触・交流の痕跡がある。華南ぜんたいのイスラームの拠点である広州懷聖寺は、ベトナムが輸入した中国紙の生産地仏山市と広州市の境界にあり（仏山中心部から約）7 km）人と物の往来が可能であった。

なお、「チャンパー王家文書」の漢文及びチャム文裁判文献による限り、チャムにおける裁判は、統治者の代理人としてもカーディーの存在が確認できなかった。統治者すなわちチャンパー藩鎮王（本鎮王）が、チャム人およびキン人藩僚の補佐のもと、直接裁判を行っているように見受けられた。すなわち、阮氏の裁判制度に基づかない民族別の自治区的な司法・裁判制度に基づくチャンパー藩鎮王による裁判においてある程度実施可能であったであろうイスラーム法廷の実施は、「チャンパー王家文書」所収の裁判記録等の文献からは確認できなかった。

収集資料の精読の成果物として、共著論文1本、単独口頭発表4本を公開した。

・論文：坂本勇、新江利彦（2021）「ベトナム中部・チャムの叩き紙と文書について」百万塔（東京：紙の博物館）170, 33-48.

・発表：新江利彦（2021）「チャムは百越か、チャム王は呉権の子孫か、チャムへのイスラーム伝播は大越経由か」東南アジア学会公開研究会「東南アジア大陸東部のイスラーム史：チャム、カンボジアのマレー人」2021年11月23日、於・大阪大学箕面校舎。

・発表：新江利彦（2021）「ふたつのチャンパー国家間における1397年の紛争に関する一考察：八天干（ウィンドウ）と十二地支（ナクシャトラ）との組合せ暦を基にして」東南アジア学会第103回研究大会、2021年12月4日、於・龍谷大学深草校舎。

・発表：新江利彦（2022）「ふたりのチャンパー初期のイスラーム教師について：ポークロンバラウまたは主楊鬚とその兄弟ポーハニインパン」AA研共同利用・共同研究課題「ジャワ語及び東南アジア諸語テキストにみる宗教変容 イスラーム化過程における国家の戦略と役割」2021年度第3回研究会（通算第8回目）2022年1月29日、於・東京外国語大学。

・発表：新江利彦（2022）「チャムの民画パニン：そのベトナム民画における位置」日仏会館共催シンポジウム「民衆画の日仏比較 エピナル版画と大津絵を中心として」2022年2月20日、於・日仏会館。

以上。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 新江利彦	4. 巻 13
2. 論文標題 關於《占主編年史》与占城南遷賓童龍的考察	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 海洋史研究	6. 最初と最後の頁 185-203
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Shine Toshihiko	4. 巻 42
2. 論文標題 On the Chinese migrants and overseas Japanese in ancient era : comparison with Korea and Vietnam, and their role in cultural-technical transfer and diplomacy	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 The Journal of Intercultural Studies	6. 最初と最後の頁 23-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18956/00007984	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Shine Toshihiko	4. 巻 34
2. 論文標題 Cosmology of the Chams and a Comparison of It with Confucianism: From the Folktale "Dogs Go to Sue Humans"	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 SIAS Working Paper Series	6. 最初と最後の頁 91-120
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 2件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 新江利彦
2. 発表標題 チャムのイスラーム的宇宙観：サカライ・ポークック（極の哲理）を読む
3. 学会等名 2020年度第1回「ジャワ語及び東南アジア諸語テキストにみる宗教変容 イスラーム化過程における国家の戦略と役割」AA研共同利用・共同研究課題研究会
4. 発表年 2020年～2021年

1. 発表者名 新江利彦
2. 発表標題 三つの結婚移民事例 八世紀、十七世紀、二十世紀に中国・ベトナムから日本へ移住した人々
3. 学会等名 関西外国語大学国際文化研究所第6回言語・文化コロキアム公開講座「見えない『わたしたち』 マイノリティからみる歴史・地域・共生の姿」(招待講演)
4. 発表年 2020年～2021年

1. 発表者名 新江利彦
2. 発表標題 Comparison table: Malay, Cham, Huihuihua (Cham Hainan), Viet and Bahnar
3. 学会等名 天理大学学術研究教育活動助成研究「東南アジア諸民族の言語・文化交流過程の検証」第2回研究会議
4. 発表年 2020年～2021年

1. 発表者名 新江利彦
2. 発表標題 海南省三亜市回輝人(海南回族または海南チャム族)に関するメモ
3. 学会等名 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題「ジャワ語及び東南アジア諸語テキストにみる宗教変容 イスラーム化過程における国家の戦略と役割」第3回研究会
4. 発表年 2020年～2021年

1. 発表者名 新江利彦
2. 発表標題 チャムは百越か、チャム王は呉権の子孫か、チャムへのイスラーム伝播は大越経由か
3. 学会等名 東南アジア学会公開研究会「東南アジア大陸東部のイスラーム史：チャム、カンボジアのマレー人」(大阪大学箕面)(招待講演)
4. 発表年 2021年～2022年

1. 発表者名 新江利彦
2. 発表標題 ふたつのチャンパー国家間における1397年の紛争に関する一考察：八天干（ウィンドウ）と十二地支（ナクシャトラ）との組合せ暦を基にして
3. 学会等名 東南アジア学会第103回研究大会（龍谷大学）
4. 発表年 2021年～2022年

1. 発表者名 新江利彦
2. 発表標題 ふたりのチャンパー初期のイスラーム教師について：ポークロンパラウまたは主楊鬚とその兄弟ポーハニインパン
3. 学会等名 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題「ジャワ語及び東南アジア諸語テキストにみる宗教変容 イスラーム化過程における国家の戦略と役割」第8回研究会
4. 発表年 2021年～2022年

1. 発表者名 新江利彦
2. 発表標題 チャムの民画バニン：そのベトナム民画における位置
3. 学会等名 日仏会館共催シンポジウム「民衆画の日仏比較 エピナル版画と大津絵を中心として」（国際学会）
4. 発表年 2021年～2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------